

XII. 追悼

上原重男 先生 生態機構分野 教授

上原重男先生は、8月24日逝去されました。享年59。

先生は、昭和44年東京大学農学部林学科卒業、同46年同大学大学院農学系研究科修士課程林学専門課程修了、同48年京都大学大学院理学研究科修士課程動物学専攻修了、同51年同博士課程動物学専攻単位修得退学後、同56年京都大学理学博士の学位を授与されました。昭和51年から53年にかけて国際協力事業団技術協力専門家としてタンザニアに派遣され、野生チンパンジーの保護と生態調査に従事されました。その後、東京大学理学部人類学教室客員研究員、札幌大学教養部助教授・教授、同大学法学部教授を経て、平成11年京都大学霊長類研究所教授に就任されました。

先生は、京都大学アフリカ類人猿研究グループ結成当初からの中心的メンバーで、タンザニア・マハレ山塊国立公園の野生チンパンジーの採食する植物やその採食技術の年齢性別によるの違いなどの研究に携わられました。近年、チンパンジーの捕食行動を被補食哺乳動物の研究に拡張する、あるいは、カルチュラル・プライマトロジーに関心を持ち、マハレとウガンダ南西部カリンズの森のチンパンジーのシロアリ採食の地域間比較研究などに取り組まれました。また、日本霊長類学会の学術誌「霊長類研究」の編集長を務めるなど、霊長類学に関する論文、専門書、教科書の執筆や編集に携わるほか、国内外の若手研究者の育成にも力を尽くされ霊長類学の発展に大きく寄与されました。スワヒリ語と英語が堪能で、自然を愛するザックバランな国際人として人々に親しまれる存在でした。

文責：マイケル A ハフマン

竹中修 先生 遺伝子情報分野 教授

平成 17 (2005) 年 3 月 3 日早朝、遺伝子情報分野・竹中修教授が亡くなられた。くしくも当日は定年退職を記念した国際シンポジウムが開かれており、竹中先生がその中で最終講義を行うはずになっていた日であった。生真面目な生化学者らしく常にスケジュールをメモしておられたことを思い起こすと、この日に亡くなられたのは決して偶然ではないという気がしてならない。とにかく最後まで全うして、長い研究生生活の思いの丈を聞かせて欲しかったとも思うが、折から来日した近隣諸国からの友人たちに囲まれての旅立ちは、いかにも竹中先生の研究生生活を締めくくるのにふさわしいものだったのかもしれない。

竹中先生が霊長類研究所に赴任されたのは 1974 年の 1 月である。新設された生化学部門の助教授だった。当時 33 歳。子供がいなかった竹中先生はマーサという名の小猿を飼っておられた。免疫系やヘモグロビンタイプの成長に伴う変化を調べるためであったが、跳ね回る小猿を抱いた姿を覚えている方も多いであろう。またニホンザルを乗鞍岳にまで連れて登ったり、アフリカに棲むヒヒの血液を用いたりして、高地適応の研究をしておられた。日本各地で行われていたニホンザル総合調査には欠かさず出かけられ、全国のサルの血液サンプルを集めておられた。竹中先生はその後、野外と実験室をつないだ研究、フィールドに出る生化学者として名を馳せることになるが、その志向性はこの当時からのものであったろう。

竹中先生の研究にとっての大きな転機は二つあったと思われる。一つは、1980 年にインドネシアにおけるマカク属の種分化を研究する現地調査に参加されたこと、もう一つは 1987 年からいち早く取り組まれた父子判定の研究である。そのいずれもが竹中先生の霊長類研究所における位置、役割を決定的なものにした。外国における野外研究はその後インドネシアのスラウェシ、さらにはタイをはじめとする東南アジア全域、全世界へと対象を求めて広がっていったし、父子判定など分子マーカーを用いた生態学への応用研究は、霊長類の枠を超えて、他の哺乳類、両棲類、は虫類、さらには無脊椎動物へと広がっていった 1986 年に確立された PCR 法による DNA 増幅技術は、明らかにこの分野への追い風となった。

竹中先生は、酒の好きな研究者だった。実験がうまくいったと言っては乾杯し、友人が来たと言っては宴を張った。難しいこと、説教じみたことは、決して言わなかった。あくまで楽しく陽気にという酒で、むしろ聞き役に回ることが多かったように思う。飲み仲間としては最高の部類に入るのかもしれないが、欠点は一つ、無茶苦茶酒に強いことで、いつも最後はこちらが酔態をさらす羽目になった。

竹中先生は、霊長類学会や雑誌「プリマーテス」の編集、各種国際学会・シンポジウムの開催等々、研究に付随する諸活動においても非常に重要な役割を果たしてこられた。特に平成 10 (1998) 年から 5 年間続いた COE 形成基礎研究「類人猿の進化と人類の成立」では、その代表者をつとめられた。世界をまたにかけた、また多方面

にわたる研究者との付き合いが、そしてもう一つ酔ってなお乱れることのない友人知古との交わりが、こうした活動を支える基盤になっていたことは間違いない。

今になって思うのだが、ここ数年の竹中先生は明らかに疲れておられた。意のままならないこともあったろうし、COE 研究以降の目に見えない重圧もあったであろう。毀誉褒貶は世の常である。人生に”もし”ということはありませんが、2～3年の休暇をとって戻ってこられれば、退官するとはいえ、まだまだ活躍していただける方であった。何故か最晩年は死に急ぐかのように往ってしまわれた。それが悔しい。

昨今はゲノム科学が花盛りである。竹中先生のやっこられた研究は、それと近いところにいるけれども、視点はあくまで霊長類学であった。今後、この分野からどのような新展開が起こりうるのか。竹中先生がよく「哲学を持て」と言われていたことの意味を考えながら、後進の方々の奮闘を期待したい。

文責：渡邊邦夫